



TITLE:

繊維工業と労働 - 労働指向の一性質について -

AUTHOR(S):

菊田, 太郎

---

CITATION:

菊田, 太郎. 繊維工業と労働 - 労働指向の一性質について -. 経済論叢  
1931, 33(4): 626-630

ISSUE DATE:

1931-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130083>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號四第

卷三十三第

行發日一月十年六和昭

## 論叢

公私混合營業……………法學博士 神戶 正雄  
英國の重農主義者……………經濟學博士 堀 經夫  
マルクス地代論の解釋……………文學博士 高田 保馬

## 時論

滿蒙爭議の實相……………經濟學博士 作田 莊一

## 研究

金數量說に就いて……………經濟學士 松岡 孝兒  
ゼーリング教授の農業恐慌論……………經濟學士 靜田 均  
住居統計に就いて……………經濟學士 岡崎 文規

## 說苑

育子教諭書について……………經濟學博士 本庄榮治郎  
商品勘定の損益分記法……………經濟學士 小菅 敏郎  
助郷不勤滞金の處分……………經濟學士 黑羽兵治郎  
シシュレーの「漁業經濟論」に就いて……………經濟學士 岡本 清造  
纖維工業と勞働……………經濟學士 菊田 太郎

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## 纖維工業と労働

—労働指向の一性質について—

菊田 太郎

アルフレッド・ウェーバーは、工業立地を決定する一般因子として、原料の價格、運送費の外に、労働費を挙げ、その立地に及ぼす影響のみを論じた。<sup>1)</sup> 併し、かかる取扱方は、理論の第一歩に於いてのみ許さるべきものであつて、嚴密に云へば、不充分たるを免れない。何故と云ふに、一工業の労働費を決定する各地點に於ける労働能率・勞賃の高低は、正にその地點にその工業が存在することを、一の有力な原因として定まるから。否、一般に、各工業生産過程の實行に必要な労働

者は、その工業の立地に於いて始めて求め得るものだからである。然らば、工業立地は立地因子たる労働費或は労働力に如何なる影響を及ぼすか。また逆に、かくして變化した労働に如何に制約されるか。一言で云へば、工業立地と労働との相互關係如何。この問題について要を得た論述は、纖維工業の労働指向を對象とする Karl Wegner の論文<sup>2)</sup> “Die Arbeitsorientierung als Standortfaktor” の一節 “Die Lagerung nach der Arbeitskraft” である。

## 二

ウェーバー所説の要旨はかうである——  
特定の地點をして一工業の立地たらしめてゐる因子を明瞭に指摘することは、甚しく困難である。蓋し、先づ、多數の立地因子は同時に同一地點に作用し、<sup>3)</sup> 第二に、現在の工業立地は多く過去の立地因子の影響の下に定まつたからである。今前の點は暫く措き、後の點のみを見るに、「經濟史の教ふる所によれば、初期資本主義工業の存在した場所は、立地基礎に根本的な變

- 1) Alfred Weber, Über den Standort der Industrien, I. Teil, Reine Theorie des Standorts, 1909. S. 32/3, 15/6. Derselbe, Industrielle Standortlehre (Grundriss der Sozialökonomik, VI. Abt., S. 61.) 拙稿, アルフレッド・ウェーバーの工業立地理論について(本誌第三十三卷第一號, 一一五, 一一三頁)
- 2) 上掲拙稿(一一八頁)
- 3) Jahrb. f. Nationalö. u. St., III. Folge, 78. Bd., 1930, S. 161 ff.

化があつたに拘らず、現在も、殆んど例外なく、同一或は類似の工業を有し、また、高度資本主義工業の大部分は、立地論の見地からすれば、偶然に起されたものであるに拘らず、依然その偶然的立地を守り、更に發展の勢をすら示してゐる<sup>4)</sup>。かゝる結果を生ぜしめる第一の原因は、云ふまでもなく、立地變更に伴なふ費用・危険の大なることであらう。併し、立地因子が立地自體の存在に制約されること、即ち、立地が立地因子を創造し、これによつて自己を固めると云ふ事實も、有力な原因となる。

この關係は、勞働指向について特に明瞭に認められる。勿論、各工業が比較的低廉な勞働力を求めることは、固より當然である。併し、一層重要なのは、立地に於いて求むる勞働力を必要なだけ獲得し得ること、これでなければならぬ。何故と云ふに、新しく勞働力を養成するには、多大な費用の外に、相當長い時間を要するから。従つて、勞働基礎としては、勞賃の場所的高低よりも、勞働者の質的―或は職業的―構成の方

が一層重要である。換言すれば、勞働指向工業は、よし勞賃水準が高いにしても、熟練勞働者を直ちに必要なだけ求め得る、一度選擇した立地に止まる傾向が著しい。かくして、偶然的な立地が自然的立地となるのである。

### 三

然らば、最初の立地選擇は如何にして行はれ、又如何なる手段によつて熟練勞働者の欠缺に基づく障害を克服したのであらうか。現在の纖維工業の中心を生ずるに與つて力のあつた事情には、農業制度・ツンフト制度、古來からの通商路・工業の存在、都市・國家の政策、勞働者の移住、技術の發達による變革等、幾多數へ得るであらう。併し、勞働立地成立の事例は、敢て遠い過去に遡らずとも、最近にもその數が多い。

第一に、云ふまでもなく、勞働事情が有利な場所は他の長所を有せずとも、勞働指向工業の中心となる場合が少くない。能率は低いにしてもそれ以上勞賃の廉い印度・日本・支那の綿業が、その例である。就中最

4) これについては、野副重次、工業立地因子段階論(經濟學論集新卷第五號)参照

5) Salin, Standortverschiebungen der deutschen Wirtschaft. In Harms "Strukturwandlungen d. deutsch. Volkswirtschaft," S. 79.

も遅く發達したのは支那であつて、世界大戰中に至つて漸く綿絲の輸入を防壓し得た。西歐に比して勞賃の低廉な印度・日本すら、支那とは競争し得ない。それで、日本の如きは、製品の代りに資本を輸出し、支那で綿業を經營するに至つた。

第二に、一工業の衰滅が他工業成立の原因となることも珍らしくない。嘗て獨逸のミンデン・ラーフェンスブルグ附近で纖維工業が煙草加工に代つたが、同一の現象は、現にエルツ山地に認められる。即ちこの山地では玩具工業が次第に衰微の運命にある。そして、その結果過剰になつた勞働力が、纖維工業を牽引するたために後の部門は着々地歩を占めて行くのである。

更に、國家の産業政策が立地を生ぜしめることは、一層多い。最近の例を見るに、ハンガリーは一九一八年に、ジーベンスブルグをルーマニヤに割譲したこと、を主な原因として、纖維工業の大部分を失つたけれども、その後、輸入禁止、關稅設定、獎勵金下附、工業教育振興等の手段によつて、十年間に労働者を四萬人

まで増加し得た。<sup>6)</sup>

#### 四

かやうに、労働立地の成立・移轉を生ぜしめる原因は區々であるに對し、一度成立した立地の發展は、常に同一の經路をとる。

既記の如く、熟練労働者が絶無或は僅少な場所に工業を興すことは、極めて困難である。のみならず、この困難を凌いで工業が成立した場合にも、當初は労働能率が質的・量的何れよりも低く、従つて産額も少ければ、勞賃も廉い。現在の印度・支那は勿論、前世紀末の日本、同中葉の合衆國南部の綿業、何れもさうであつた。

所が、労働能率は、時の經過に連れて、質量ともに向上する。同時に、勞賃も騰貴する。それで、簡單な商品の生産は後進の工業地域に委ねるに至る。この過程は、労働者が習熟する結果として、一部は自然的に生ずるが、生活程度向上の欲求に驅られた労働者の努力によることも多い。何れにしても、労働力の強味は

6) „Textil-Zeitung“ (7. Sep. 1928).

7) 二九頁

その優秀な質に存することとなる。

日本綿業發展の歴史にも、かゝる傾向は相當明瞭であるけれども、最も顯著な例は英吉利である。英吉利勞働者の得る勞賃は、一般に勞賃水準の高い西歐中にあつても、特に高い。この高價な勞働を使用しながら世界市場で競争し得るのは、全く技術の進歩、高い勞働能率の結果である。所で、かゝる高級な技術・勞働の利益は、高級品の生産のみが享受し、粗製品はこれに與らず、従つて競争力を有しない、英吉利綿製品は輸出が戦前に比し三分の一を減じたのは、正に粗製品市場——特に東洋——を失つたからである。そして、これが對策も、製品を愈々高級化し、この部分で世界獨歩の地位を固守することとありとされてゐる。<sup>8)</sup>

國內的な例を求めると、合衆國の綿業に於ける南北<sup>10)</sup>の對立がある。當初、起源の古い北部の綿業は、豊富な動力源と歐羅巴移民の勞働力を基礎に、紡績を行ふに對し、南部では綿花の繰上げ、粗製品の製造に限られてゐた。換言すれば、兩者は發展段階を異にしたの

であるが、この對立は現在まで繼續し、勞賃の差も可成り著しい。従つて、マサチューセツツ附近の斯業は、高級製品の生産のみに特化し、これによつて優秀な勞働の力を發揮せんとしてゐる。その結果、北部では二〇番手以上が産額の三分の二(價格で)に上り、二〇番手以下の太絲は三分の一に過ぎないに對し、南部はほぼ反對の比率を示す。

## 五

勞働立地の發展は徑路を等しくすると云つても、その速度及び限度について一般的立言をなすことは、不可能である。

先づ、これを決定する重要な因子に、勞働者の資質がある。先進の工業國乃至工業地域は、勞賃の高まることを避け得ないけれども、高い能率が充分これをカバーする。従つて、勞賃の騰貴は決して不利益ではなく、寧ろ經濟的福祉の増進を意味するものとして、喜ぶべきである。シュルツェ、ゲルバーニツツの「大工業論」以來、屢々かう主張される。併し、能率を高める

8) Wirtschaft u. Statistik, 1927, S. 181 参照

9) Manchester Chamber of Commerce, Handbook, 1928.

10) マサチューセツツ州を中心とする地域と南北カロリナ州を中心とする地域

ことによつて高賃銀の不利を補ひ得るや否やは、勞働者の資質によることである。現に、印度に於いては、ボンベイの紡績業が、歴史の古いに拘らず、充分製品を高級化して輿地に對抗し得ない原因の一は、勞働者が出稼人であつて、勞賃の騰貴に伴ひ、歸郷することが早くなり、勞働者の交代が頻繁となつて、能率を高め得ないからである。

次に、勞働費以外の立地因子が及ぼす影響も輕視し得ない。英吉利、獨逸のライン・サクソニヤ地方では、炭田の存在が綿業發展の一因となつてゐるし、日本の發展は、有利な位置・運送事情に負ふ所が多い。更に、獨逸に於ける大陸封鎖の影響で明かなやうに、立地成立の場合と等しく、經濟外の事件が作用することもある。

要するに、勞働指向工業立地の發展が、勞働基礎に甚しい變化を與え、またこの變化が逆に勞働指向を左右すること、従つて、纖維工業全體に有利な勞働地は極めて稀で、普通、品質を異にする各種生産物の個々

について存在し得るに止まることは、明瞭である。或は次のやうに云つてもよからう。即ち、歴史的には、立地の發展に伴ひ勞働市場の構成が變化し、その結果勞働力の質の差異が重要になる。また、場所的には、各勞働市場は發展段階を異にし、これは國際間或は地方間の分業成立の一因をなすと。

貧弱な豐源と稠密な人口、この二特性を有する我が國民經濟を發展せしめる途は、商工立國にありとするのが、廣く行はれてゐる意見である。この場合に所謂工業は、當然、纖維工業の如く勞働指向工業の範疇に屬する筈である。従つて、工業―特に纖維工業―の勞働指向は我が國に於いて特に注意を要する問題と云はねばならぬ。この問題の一側面に關する論述を抄録する所以である。